



屋久島でアカヒゲは繁殖しているのか？

— 8・9月期の記録が語るもの —

福留千穂¹・尾上和久²・上田恵介^{3*}

1. 屋久島野外活動総合センター。〒891-4311 鹿児島県熊毛郡屋久島町安房 2353-30

2. 日本野鳥の会福岡支部。〒815-0033 福岡市南区大橋 1-7-6 森藤ビル 501

3. 立教大学。〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1

はじめに

アカヒゲ *Larvivera komadori* は、日本列島の固有種で、男女群島やトカラ列島、奄美大島で繁殖する基亜種のアカヒゲ *L. k. komadori* と、沖縄本島で繁殖するホントウアカヒゲ *L. k. namiyei*、八重山諸島に生息すると言われているウスアカヒゲ *L. k. subrufus* の3亜種が記載されている（日本鳥学会 2012）。しかしこのうちウスアカヒゲはアカヒゲの越冬個体群の可能性が指摘されており、八重山諸島では繁殖はしていないと考えられている（関 2010）。

屋久島における亜種アカヒゲ *L. k. komadori* の生息状況は『日本鳥類目録改訂第7版』（日本鳥学会 2012）ではMB（migrant breeder）、いわゆる夏鳥として渡来して繁殖するとされている。しかし実際に屋久島での夏季のアカヒゲの観察記録はかなり存在するものの（岡久（2010）を参照）、その多くは8月以降の秋の渡りの時期の観察記録で、巢も見つかっていないことから、アカヒゲが屋久島で本当に繁殖しているのかどうかはよくわかっていない（関 2010, 2018）。

第一著者は屋久島に居住し、2020年7月から天気の良い日にはほぼ毎朝、楯川から小瀬田にかけての集落の周囲を、野鳥観察のために歩き、見聞きした鳥の種類を記録している。また

ガイドとして自然観察ツアーを行う中で、出会った鳥を記録している。第二著者は屋久島に複数回滞在し、鳥類標識調査を続けており、複数のアカヒゲを観察し、捕獲標識した経験を持っている。

これらの屋久島における調査の中で、著者らはアカヒゲを複数回観察、標識することができ、また屋久島でのアカヒゲの地位を推測できる写真を撮影することができたので、ここに報告し、これらの観察、捕獲記録、および文献調査から屋久島におけるアカヒゲの生息状況について考察する。

アカヒゲの学名は日本鳥類目録改訂第7版（2012）ではサヨナキドリなどの含まれる *Luscinia* 属となっているが、アカヒゲはすでに Seki（2006）、Sangstar *et al.*（2010）によるDNA解析の結果、コマドリやシマゴマ、コルリなどとともに *Larvivera* 属を構成することが明らかになっているので、この属名を用いた。

観察記録

長年にわたり、8-9月期に屋久島にわたって標識調査を実施している第二著者は2012.9.2に栗生地区にて2羽のアカヒゲを同時に観察した。1羽はオスでおそらくは成鳥、もう1羽はメスの幼鳥と思われる個体であった。また

2022年2月2日受理

キーワード：屋久島、繁殖、アカヒゲ、出生地分散、幼鳥

*: keisuke@rikkyo.ac.jp

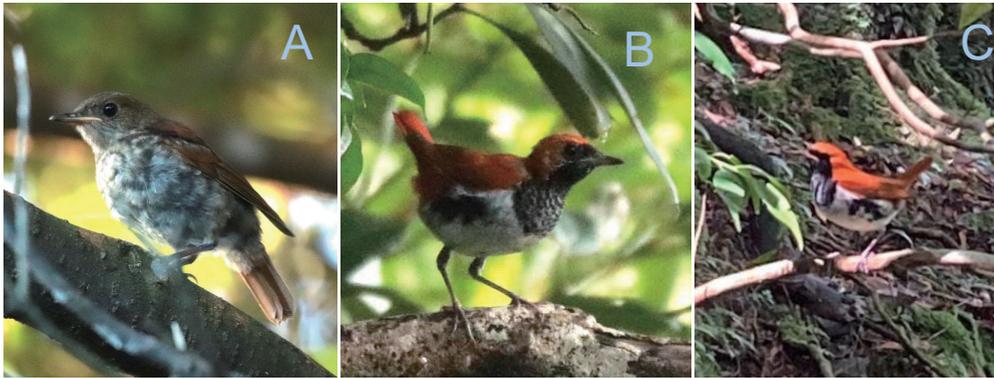


図1. 8-9月に記録されたアカヒゲ. A. 幼鳥 (U, J) . 撮影日: 2021年8月28日, B. オス幼鳥? (M, J?) 撮影日: 2021年9月8日, C. オス成鳥? (M, A?) (撮影日: 2021年9月15日)
 Fig. 1. Ryukyu Robins photographed on Yakushima Island in August and September, 2021. (U=unknown, M=Male, J=Juvenile, A=Adult, ?=uncertain).

2015.8.20にはオスの幼鳥と思われる個体を安房にて観察している。

第一著者は、2021年8月7日、屋久島の西部林道に沿った照葉樹林（標高約70m）で、自然観察のツアー中にアカヒゲの幼鳥らしい個体を確認した。しかしこの時は双眼鏡で確認しただけで、写真撮影はできなかった。

アカヒゲの写真撮影に成功したのは2021年8月28日で、第一著者の居住する小瀬田の集落であった。観察場所はスギ *Cryptomeria japonica* の植林地の隙間にある若い二次林（標高約70m）で、ハマヒサカキ *Eurya emarginata*, ヒサカキ *E. japonica*, タブノキ *Machilus thunbergii*, ハゼノキ *Toxicodendron succedaneum* などが優占する林である。アカヒゲを観察したのは午前6:30頃で、約3mの距離から写真撮影に成功した（図1A）。観察中、アカヒゲは梢を行き来しており、キビタキの若鳥と居場所を争うかのように、追いかけて森の奥に姿を消した。このとき鳴き声は発していなかった。

観察した個体は嘴の基部の黄色が残っていること、また喉から腹にかけて褐色斑が多く、頭部に褐色味が強いことから、巣立ち後まもない幼鳥と判断できた。アカヒゲのオスは成長が進むと、胸と腹部の境界付近の黒色の羽毛がはっきりして、コントラストが目立つようになり、脇腹の黒斑も出てくるが、写真の個体はまだその段階にはなく、性別は不明と断定せざるを得ない。

次にアカヒゲを観察したのは2021年9月8日の夕方（17:45）、場所は楯川の農道の植林地の隙間にある照葉樹の二次林で、成鳥にしては顔の色合いがはっきりせず、アカヒゲの若いオスの様に思えた（図1B）。

この年には他にもアカヒゲが記録された。2021年8月28日の10:50に白谷雲水峡の苔むす森付近（標高913m）において、倒木の上を移動している本種のオスが観察された（藪田久美子、私信）。また同日の13:20には同じ場所で、同じ観察者により、枝の上を何度か移動し、観察者に近づいたのち、地上を移動しな

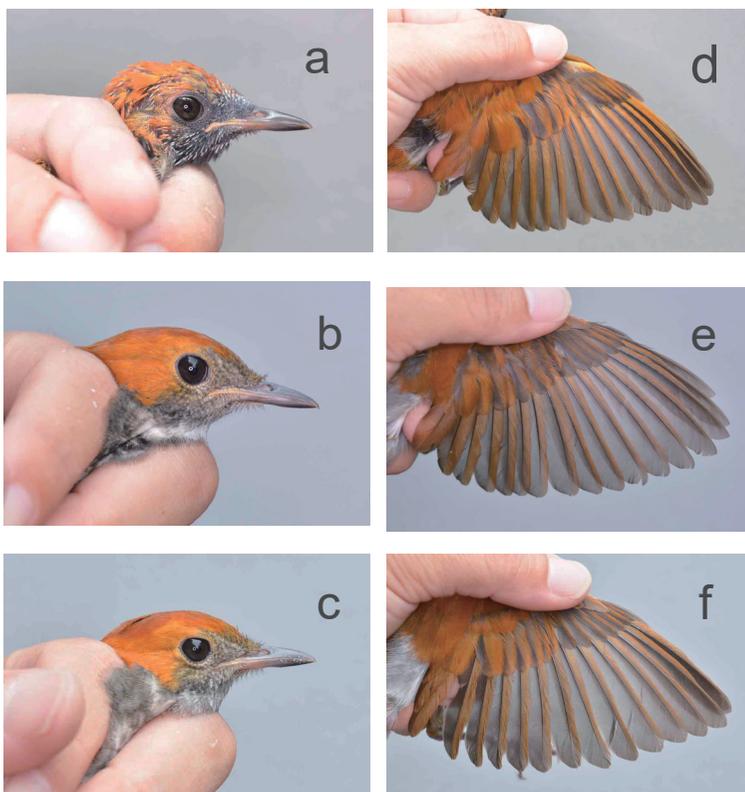


図2. 標識されたアカヒゲ幼鳥. a, d. オスと思われる幼鳥 (M?, J) (撮影日: 2014年8月26日), b, e. メスと思われる幼鳥 (F?, J) (撮影日: 2015年8月23日), c, f. メス幼鳥 (F, J) (撮影日: 2015年9月2日). 3羽とも大雨覆は褐赤色であり各羽には暗褐色の縁が認められる.

Fig. 2. Juvenile Ryukyu Robins ringed on Yakushima Island between August and September. (M=Male, J=Juvenile, ?=uncertain). The greater coverts of all three birds are brownish-red with dark brown edges on each wing.

がら遠くに去っていった午前中と同一個体と思われるアカヒゲが撮影された(図1C). この2回の観察中, 当該個体は鳴き声を発することはなかった. また同年9月30日にはヤクスギランドにおいて, アカヒゲ1羽(性別, 性幼不明)が観察されている(安田亮太, 私信).

標識記録

第二著者は2014年と2015年の標識調査で,

いずれも栗生にて, 合計3羽のアカヒゲ幼鳥を捕獲・標識することができた. 2014年は8月26日にオス幼鳥(若鳥)と思われる個体を1羽. また2015年には8月23日と9月2日にメス幼鳥(若鳥)と思われる各1羽を標識した(図2). 年齢については, (1)3羽共に口角にまだ黄色味が残っている, (2)どの個体も虹彩は暗めであることは確認できたが, 虹彩については, 2歳以上でも濁った色の個体が散見される

ので、これだけでは幼鳥であるとの断定はできなかった。しかし山階 (1941) には、幼鳥は (3) 「雨覆は褐赤色にて各羽は暗褐色の縁を有し、また大雨覆外弁の先端は他より淡い」との記載があるので、これらのことから、標識された3羽は幼鳥と判定した。

考察

屋久島ではアカヒゲの夏季の記録がかなり存在する。しかし今回の著者らの観察・標識記録では、その多くが幼鳥 (若鳥) であるらしいことが示唆されている。成鳥は観察しにくい、または捕獲しにくいというバイアスはあるかもしれないが、この時期に屋久島に出現するアカヒゲの多くが若い個体であるということは興味深い。

岡久 (2010) は2006年から2008年にかけての3シーズン、いずれも8月にアカヒゲの生息状況調査を行い、標高630—1080mの地点で13例の観察 (写真あり) またはさえずりの記録 (および他に2件の私信) を報告している。こうしたことから、屋久島においてアカヒゲが夏季も棲息して、繁殖している可能性が言われてきた。

しかしもし屋久島においてアカヒゲが繁殖しているなら、繁殖期である5-6月にもっと記録があっても良さそうなものである。しかし5月の記録は、唯一、1950年5月28日に麦生の標高200mと600mでの記録があるだけである (白井 1956)。最近の私たちの調査では、第一著者は2020年5月20日の午前7時頃、ヤクスギランドを過ぎた標高1,070mの針広混交林で、アカヒゲらしい鳴き声を聞いている。また2021年5月16日、午前7:15頃に安房の貯木場付近 (標高7m) でアカヒゲの囀りを確認している。しかし5月はまだ春の渡り時期であり、移動途中の個体群が通過している可能性は捨てきれない。

では6月はどうか。花輪 (1984) が1983年6月6日に大川林道の標高510mの地点でさえずりを聞き、江口ほか (1989) が同年6月14日に永田歩道の低標高地のスダジイ *Castanopsis sieboldii* 林で2個体をさえずりで記録しているものの、関 (2010) が2009年6月初旬に、一湊、西部、大川、小楊枝、安房、白谷の各林道沿いに125の調査点 (標高31~1,341m) を設け、アカヒゲのさえずりをプレイバックして行なった詳細な調査ではアカヒゲを確認する事はできなかった。私たちが2020年6月7日に、大川林道から花山歩道にかけて (標高632~1264m)、約2キロのコースで早朝に鳥類センサスを行ったが、アカヒゲを記録する事はできなかった。

屋久島で記録されたアカヒゲについて、実際に繁殖地がわかった例として、トカラ列島中之島で巢内ビナの時期に足環をつけられて放鳥された個体が、1ヶ月後の7月末に屋久島で窓に衝突死して回収された事例がある (Seki & Ogura (2007)。これは1例だが、少なくとも屋久島で夏季に観察されたアカヒゲの繁殖地の確実な記録として、意味のあるものと思われる。

今回、報告した8月~9月期のアカヒゲのほとんどが幼鳥らしい個体の記録である。これらのアカヒゲもトカラ列島で繁殖している集団なのだろうか。しかし屋久島はトカラ列島より北に位置しているので、通常の秋の渡りによる飛来とは考えにくい。台風などの気象条件の影響で迷行的に屋久島に飛来してきた可能性も考えられるが、幼鳥が多く記録されるのは、アカヒゲ幼鳥が出生分散 (natal dispersal) の時期に一時的に周辺地域に移動する傾向を持っているのかもしれない。またアカヒゲは長崎県男女群島でも繁殖していることが知られているので、トカラ列島の個体群に加えて、男女群島の個体群もこの時期に屋久島を通過している可能性も

捨てきれない。

どちらにしろ、関 (2010, 2018) も言うように、屋久島においてアカヒゲが繁殖している可能性がまったくないとは言えないが、繁殖期に確実な営巢の証拠がない限り、繁殖はかなり疑わしいと言える。屋久島で夏 (7-9 月) に記録されるアカヒゲは、トカラ列島の集団、もしくは男女群島の集団 (のどちらかまたは両方) が飛来していると考えるのが自然である。

これらのことから、今後新しく発行される日本鳥類目録のアカヒゲの屋久島での地位は MB から PV (passage visitor) に変更されるべきと、著者らは考えている。

謝辞

文献の探索では日本野鳥の会の原元奈津子氏、および山階鳥研の小林さやか氏にお世話になった。また江口和洋、川路則友、永田尚志の各氏には、江口ほか (1989) の論文の内容について現地調査の内容を伺うことができた。関伸一氏には草稿を読んでもいただき、アカヒゲの成幼、性の識別について、多くの有益な助言を得た。ここに記して御礼を申し上げる。

引用文献

- 江口和洋・武石全慈・永田尚志・逸見泰久・川路則友. 1989. 屋久島における森林性鳥類の垂直分布. I. 繁殖期. 日本生態学会誌 39: 53-65.
- 花輪伸一. 1984. 屋久島原生自然環境保全地域における鳥類. 屋久島の自然・屋久島原生自然環境保全地域調査報告書. pp.569-585. 日本自然保護協会, 東京.
- 日本鳥学会. 2012. 日本鳥類目録改訂第7版. 日本鳥学会. p.438. 日本鳥学会, 三田.
- 岡久雄二. 2010. 屋久島におけるアカヒゲ *Erithacus komadori* の確実な観察記録. 山階鳥学雑誌 42: 91-95.
- Sangstar, G., Alstrom, P., Forsmark, E. & Olsson, U. 2010. Multilocus phylogenetic analysis of old

world chats and flycatchers reveals extensive paraphyly at family, subfamily and genus level (Aves: Muscicapidae). Mol. Phylogenet. Evol. 57: 380-392.

Seki, S. 2006. The origin of the east Asian *Erithacus* Robins *Erithacus komadori*. Mol. Phylogenet. Evol. 39: 899-905.

関伸一. 2010. 繁殖分布の周辺域におけるアカヒゲの生息状況(II) 速報九州森林研究. 63: 95-96.

Seki S & Ogura T (2007). Breeding origins of migrating Ryukyu Robins *Erithacus komadori* inferred from mitochondrial control region sequences. Ornithol. Sci. 6: 21-27.

関伸一. 2018. アカヒゲがつなぐ琉球の島々—アカヒゲの渡りと系統地理. 島の鳥類学(水田拓・高木昌興編). pp.58-75. 海游社, 東京.

白井邦彦. 1956. 屋久島の野生鳥獣相及び屋久犬. 鳥獣集報 15:53-79.

山階芳麿. 1941. 日本の鳥類と其の生態 第2巻. p.332. 岩波書店, 東京.

Sightings and banding records of the Ryukyu Robin between August and September in Yakushima Island, southern Japan. Do they breed on this island?

Chiho Fukudome¹, Kazuhisa Oue² & Keisuke Ueda^{3*}

1. Yakushima Nature Activity Center. 2353-30 Anbo, Yakushima-cho, Kumage-gun, Kagoshima 891-4311
2. Wild Bird Society of Japan, Fukuoka chapter. 1-7-6-501, Ohashi, Minami-ku, Fukuoka 815-0033
3. Rikkyo University. 3-34-1 Nishi-ikebukuro, Toshima-ku, Tokyo 171-8501

We banded three Ryukyu Robins and observed three ones at Yakushima Island between August and September in 2014, 2015 and 2021. All the robins were identified as juveniles. There were some sightings and listening record of the robin in the breeding season, May to August. However, there have never found the nest and eggs. We consider, the recorded individuals were dispersing from Tokara islands and/or Danjyo islands.

Keywords: Yakushima island, breeding, Ryukyu Robin, Larvivora komadori, natal dispersal, juvenile

*: keisuke@rikkyo.ac.jp